チャプレンメッセージ

日野原先生の天国への希望

司祭　ケビン・シーバー

これは去る七月二九日、青山葬儀所で行われた日野原重明先生の葬送・告別式の説教を一部省略したものです。

＋　＋　＋

この場をもって、敬愛の日野原重明先生が成し遂げられた偉業を一つ一つ褒めたたえたいところです。わたし自身、聖路加国際病院で働いているチャプレンとして日野原先生に大変お世話になっており、先生を心から尊敬しております。しかし、たとえ先生が聖路加国際病院に就職してからの七六年にだけ絞っても、先生が立てられた功績を語り出したら、夕方まで語っても語り尽くせないと思います。

なので今日は、そういう話をするつもりがございません。なお、あえて先生の功績を語らないもう一つの理由があります。それは、それらの功績は先生が天国で永遠の命を楽しめるという希望とは全く関係ないからです。人間で自分の業で天国に入る資格を勝ち取った人は一人もいないのです。日野原先生ご自身はだれよりもこのことをご存知でした。先生がずっと温めて来られたキリスト教の信仰の根本的な真理です。

話は変わりますが、日野原先生がお生まれになった翌年、オーストリア・ハンガリー帝国の最後の皇太子、オットー・フォン・ハプスブルク（一九一二年～二〇一一年）が生まれました。ちょうど六年前、そのお葬式が行われました。ハプスブルグ家の最後のいわゆる帝国葬でした。

ハプスブルグ家とは、一五世紀から二〇世紀の初期までヨーロッパ各国の君主を輩出した貴族です。中央ヨーロッパや東ヨーロッパの大半を含むオーストリア・ハンガリー帝国の皇太子となったオットー・フォン・ハプスブルクは帝政廃止（一九一八年）までわずか2年しか現役ではなかったが、彼はその後もずっと公的な働きを続けました。第二次世界大戦中、ドイツのナチス政権にもロシアの共産主義政権にも強く反対しました。そして数多くのユダヤ人を含めて約一万五千人の人たちをオーストリアから逃げ出せるように手伝ったという活躍もしました。終戦後は、ヨーロッパの一致のために生涯を捧げました。欧州連合（EU）の始祖の一人と言っても過言にはならないと思います。

そのオットー・フォン・ハプスブルクのお葬式は二〇一一年の七月、古き帝国の都であるウィーンで行われました。告別式の後、棺はハプスブルク家の納骨堂がある教会へと運ばれました。

到着すると、教会の門が閉まっていて、修道士たちが中で待っています。そこで戸の前で入堂祈願が行われます。使者が教会の戸を三度たたきます。中から年取った神父さんの声が聞こえます。「ここを通らんとする者はだれだ」と。使者：「オーストリアのオットーです。かつてのオーストリア・ハンガリー帝国皇太子であり、ハンガリー・ボヘミア、ダルマテア、クロアチア、スラヴォニアの……」と皇太子として継承した星の数ほどの所有地、称号、位が読み上げられます。

すると、修道士は言います：「その者は知らない」、と。使者はもう一度戸をたたきます。トン。トン。トン。修道士は再び聞きます。「ここを通らんとする者はだれだ」、と。

今度はオットーご自身が長い人生の中で政治家として手に入れた栄誉などが伝えられます：「ハプスブルク家のオットー博士です。国際汎ヨーロッパ連合の議長及び国際名誉会長であり、欧州議会の議員で老議長……」としばらく続きます。修道士は「その者は知らない」、と返します。

そしてもう一度、杖のたたく音がします。トン。トン。トン。「ここを通らんとする者はだれだ」。三度目、使者は入場を祈願します：「主の憐れみを必要としている罪人であるオットーです」。修道士：「その者なら知っている」という返事が返ってきます。納骨堂の戸が開きます。そして、兵隊たちが棺を肩に担いで入ります。※

＋　＋　＋

主の憐れみを必要としている罪人であるオットーなら通らせてもらえます。オットー・フォン・ハプスブルクも、日野原重明先生も、わたしも、皆様も条件は一緒です。天国の門を通らせてもらえる唯一の資格は、へりくだり、自分が神の憐れみを必要としている罪人であると認めることです。天国で認められる肩書は「赦された罪人」しかありません。

赦された罪人とは何か。そして罪とは何か。聖書が言う「罪」とは、銀行強盗とか人殺しとかそういうあからさまな大罪という話ではありません。むしろ、罪とは創造主である神さまに背を向ける人間の心のありさまです。まことの神さまの道から離れてしまって、神に喜ばれることができない状態を聖書は「罪」と言います。そういう意味では、わたしたち人間は全員罪人なのです。この世に生を受けて生まれた人はだれでも。聖書が教えます：「**正しい者はいない（＝自分の創造主を喜ばせる者はいない）。一人もいない。悟る者もなく、神を探し求める者もいない……ただの一人もいない。**」（ローマ三・一〇～一二）

要は、神が愛を込めてこの世界を、そしてわたしたち一人一人の人間をお造りになったのに、世の中の人々はその創造主がいないかのように生きている、ということです。神さまから命もいただき、日々神さまに生かされているのに、その恩恵を認めず、それが当たり前だと思い込んだりしているのです。

逆に、神さまのご都合を伺わず自分を中心に生き、神のお望みになることではなく自分の欲求を追い求

め、結果を気にせずにすぐほしいものを手に入れ、周りの人に目を向けずに自分だけの幸せ、自分だけの満足、自分だけの立場を確保しようとする――そういう神に背を向けたような風潮のただ中にわたしたち全員が生まれ育っています。なお、こういう風潮は本当に根強くてまん延しているもので、そしてわたしたちは生まれたときからそれにどっぷり浸かっているため、自分の努力ではそこから抜け出すことはできません。その風潮の虜となっているわけです。

こういったわたしたちの心のありさまのせいで、世の中がむなしくなっています。殆どの苦悩、悲劇はここから出てきます。紛争や暴力、差別や格差、いじめや虐待、高慢や他人の苦しみに対する無関心、自分の立場を守ろうとする政治家や指導者、はびこっている不正や不正直……

そしてこれらのことに絡んでしまい罪悪感や虚無感を抱える人も大勢います。逆に全く問題視すらしない人もいますが、たとえ対抗したくても、たとえ違う生き方、違う価値観に基づいた暮らし方を目指しても、なかなか難しい、できない、結局は流されてしまうわけです。「**正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、神を探し求める者もいない……ただの一人もいない。**」

ところが、人は神さまがいないかのように生きているとしても、神さまは実際にいらっしゃらないわけではありません。神さまは確かにいらっしゃいます。いらっしゃらないどころか、父親のように、わたしたち人間をトコトン愛してくださいます。わたしたちが神さまに背を向けて離れて行ってしまったけれど、神さまはわたしたちから離れはなさいませんでした。人間は皆、罪人であるにも拘らず、神さまはわたしたちをお見捨てになることは決してありません。

これはキリスト教のいわゆる「福音」と言います。福音とは、良い知らせです。これはイエス・キリストがもたらされた喜ばしいメッセージです。聖パウロが手紙でこう書いています：「**わたしたちがまだ罪人であったとき、イエス・キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。**」（ローマ五・八）

神がいないかのように、神からどんどん遠く離れた時代精神の虜であったわたしたちを、神さまがそれでもなお愛してくださいました。その愛のゆえに、ご自分のみ子イエス・キリストをこの世に送ってくださいました。自分たちの力では世の中の根強い風潮から抜け出すことはできませんでしたが、わたしたちを解放するためにイエス・キリストはその十字架を引き受けてくださったのです。

イエス・キリストは十字架の上で、罪人の代わりにご自身の命というとてつもなく高い代価を払い、わたしたちの罪の赦しを勝ち取ってくださいました。強い愛をもって虜だったわたしたちを解放してくださいました。まことの神から離れたわたしたちを神さまと和解させてくださいました。恩知らずだったわたしたちを更なる恩恵をもって赦し、救ってくださいました。

キリストの十字架から神さまの尽きることのない憐れみが流れています。今でも。だれでもその憐れみを受けることができます。へりくだり、その憐れみを必要としている罪人であると認める人はだれでも救われます。天国の戸はそういう人に開かれるのです。

日野原重明先生はこの福音、この良き知らせを子どもの頃からよくご存知でした。この福音は先生の大きな力となりました。先生が成し遂げられた功績はすべて、神さまの憐れみへのお返しだったのです。

イエス・キリストのおかげでご自分の罪が赦され、その創造主である神さまと仲直りができたという福音から先生は力を得て、喜びと感謝をもってこの偉大な恵みに応えようとなさったのです。

よど号ハイジャック事件の時に先生は一段とこういうことに気づいたとおっしゃいます。事件の時、神さまは改めて赦して命を与えてくださったという強い感覚を抱え、残された命をもって社会、人々に仕える決心をなさったようです。

日野原重明先生はまさにクリスチャン・ドクターでした。イエスさまのお名前を必ずしも口にしなくても、そのイエス・キリストへの信仰は先生の働きの原動力でした。非常に変動の多い時代の中で常に力を尽くし、神の憐れみを示そうとなさいました。医療を通してだけではなく執筆活動、音楽、新老人の会、子ども向けの「いのちの授業」などさまざまな活動を通して、すべての命の源である神さまにわたしたちを気づかせようとなさいました。わたしたちにも神さまの偉大なる恵みを思い起こし、感謝の念、そして喜びを持つように働きかけてくださったのです。

今日、わたしたちは確信をもって日野原重明先生を天国にお送りできるのは、神さまの憐れみが確かなものだからです。日野原先生はその憐れみを必要としている罪人であると喜んで認め、「赦された罪人」の立場からずっと立派に生きて来られたのです。日野原先生に尊敬の念をお持ちの方は、先生の恩師であり、先生の救い主であるイエス・キリストにも尊敬の念を持つべきだと思います。最終的には日野原先生の長い、功績に富んだ生涯とイエス・キリストの愛と憐れみとは分けて考えられません。

では、み子イエス・キリストとその父なる神さまの広い、深い愛と憐みに今、敬愛の日野原重明先生をゆだね、先生の天国での幸福をご一緒に祈りたいと思います。

※ Kleine Zeitung 新聞2011/07/16『Zum Adieu das "Gott erhalte"』参照